

インフィニティ

作詞・作曲：優里

歌：優里

蹴とばした石が転がる道  
意地っ張りな君 似てる同士  
素直になれずに I will remember  
Record スニーカーと真似をした  
古いもの新しいもの分け隔てもなく  
I like what I always like  
oh oh oh oh

想像しない wall ride  
笑わせてくれたね all right  
All night 朝を待ってた  
もう一人の自分みたいに思ってるよ  
一生

共にいこう 君と行こう  
涙の海の向こう 進めるよ 動けるよ  
力になれるよ  
共にいこう 君と行こう  
想いがあるなら  
Let's keep feelings  
Let's keeping your heart  
僕らのままで  
Happiness with you

## ○歌詞考察

歌詞をもとに物語を作るとなるとどうしても歌詞通りに物語を展開したくて妥協ができず時間がかかってしまうので、『インフィニティ』に関しては一番だけにさせていただきます。

歌詞に出てくる英単語をそれぞれ訳すると、

- ・ I will remember⇒覚えておきます
- ・ what I like, I like⇒好きなものは好き
- ・ Let's keep feelings⇒気持ちを保ちましょう
- ・ Let's keeping your heart⇒心を留めましょう
- ・ Happiness with you⇒あなたとの幸せ

となります。

そして出てくる wall ride はスケボーの技の名前のこと。このことから歌詞に出てくる相手はスケボーが得意だということを意味し、前後の歌詞からスケボーをしながら朝を待ち、主人公は相手を信頼していることがわかります。そのあと、

『共にいこう 君と行こう 涙の海の向こう 進めるよ 動けるよ 力になれるよ』

といているので、相手と自分を励ましています。

wall ride の意味を調べていたら、『インフィニティ』の考察記事を見つけたので比べながら見ていただけたらなと思います。

記事の URL⇒<https://utaten.com/specialArticle/index/6032>

## ちくば 竹馬の友

友人の碧とは小学生からの付き合いだ。

幼稚園の頃から遊んでいた公園で、ひとり板の上に乗って滑っている男の子の姿が目に入った。身長は低めなのにシュッとした顔立ちで目は二重だった。こんなにかっこいい男の子がいるのかと小学生ながらに驚いていると、男の子の方から「君もスケボーやりたいの？」と声を掛けてきた。あいにく僕は碧のように運動神経が良くなく、スケボーの板すら乗れなかった。そんな僕を碧は逆に面白がり、よく日の出前に家を抜け出して二人でスケボーをして遊んだ。

その日常は高校一年生になった八年後も変わらず、今日も碧と僕は空が白み始める頃に家を出て、遊具がある少し大きめの公園でスケボーをしていた。碧がスケボーをする姿を僕が眺め、疲れたら音楽を聴くというのが僕らのいつものスタイルだった。

「ねえ、そのスニーカーさあ」

小さな階段の手すりの上を器用に滑っていく碧。僕にとってはどうやってスケボーの板に乗りながらジャンプするのもわからないし、回転させるのもわからない。器用だなと何度思ったかわからない感情を抱きながら少し大きめの声で碧に話し掛ける。

「うん」

声と同時にスケボーが地面に着地する音がした。話しかけてもあっさり成功させてしまう彼の運動神経の良さにいい意味で嫉妬してしまいそうになる。

「新しいやつ？」

月の淡い光と街灯の光ではっきりとは見えないが、靴の形と汚れ具合から新品のような気がした。

「そうだよ」

この前、俺の好きなメーカーが新作の靴を出したんだよ、と嬉しそうな顔で言いながら僕の左隣に座り、僕らの間に置いてあったスマホをベンチに置いたまま操作した。クラシックのようなピアノの音色が僕ら二人を包み込む。白い息が藍色の空に映える。

「このメーカーが作る靴、動きやすくていいんだよね」

右足を上げながら碧は靴を指差す。黄緑色に発色した靴が淡い光を放っている。

「あ、そういえばウォールライドっていう技ができるようになったんだけど、ちょっと見てくれる？」

「ウォールライド？」

立ち上がった碧に僕はオウム返しをする。

「垂直になった壁や斜面のきつい壁をスケボーで滑る技のこと。ちょっと見てて」

振り返り様に言った碧の声は何か企んでいるような気がした。

少し大きな公園とは言え、壁はどこにもない。強いてあげるとするなら、小さい花壇の側面くらいだろうか。でもそんなもので滑ることができるのだろうか。

不安になりながら、ベンチの後ろにある花壇の前に立って走りながら板に乗った碧を見る。しかし彼はウォールライドではなく、板と一緒にジャンプし板を回転させるキックフリップという技をした。それも三十センチほど高く。

「それ、ウォールライドじゃないよね？」

あまり技名に詳しくないが、なんとなく技が違うことだけは分かった。

僕はベンチから立ち上がって碧に聞く。すると「バレた？」と意地悪そうに笑う碧の声が聞こえた。

「おい、何年碧と一緒にいると思ってんだよ」

ベンチに戻ってくる碧の肩を優しく突き放した。

「知らないと思ったのになー」

再び意地悪そうな顔で笑う碧に僕はベンチに腰掛ける。そのあとに続いて碧も座る。

「あ、もうそろそろ帰らなきゃな」

そう言って空を見上げる碧の言葉を聞いて、僕も空を見上げた。空はいつの間にか藍色から橙色に染まっていた。

「勉強頑張れよ」

そう言いながら僕はベンチから立ち上がる。

「おい待てよ」

歩き出した僕に碧は呼び止める。

振り返ると忘れてないよな？と言わんばかりの顔で僕の目を見つめていた。彼がこの顔をするとき、決まってレコードがある店を回りに行くのだ。

彼は知り合った時からレコードが大好きだった。別に身近な人にレコードが好きと言う人は居なかったらしいが、針を刺しただけで音が鳴る現象が不思議で面白かったと言っていた。

「行くに決まってるだろ」

そう言って僕の前に手を差し出している碧の右手を掴み、立ち上がらせた。